

2019.1
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

1号

第41巻
No.354



ヤブコウジ *Ardisia japonica* Blume (ヤブコウジ科 *Myrsinaceae*)

生薬 シキンギユウ（紫金牛） 晩秋に根茎と根を掘り取り、水洗し、陽乾する。中国では全草を用いる。

成分 ベンゾキノロン誘導体：rapanone,bergenin,maesanine、フラボノイド：quercitrin,myricitrin 等。

効能 鎮咳、利尿、解毒作用があり、消化不良、腹痛、湿疹、腫れ物、膀胱炎、咳止に用いる。



生薬 シキンギユウ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



中国、台湾、朝鮮や奥尻島（北海道）、本州、四国、九州に自生する常緑小低木。やや湿った林縁に群生し、匍匐枝は長く地を這って広がり、先は直立して10-30cmの地上茎となります。葉は茎の上部に2-3段に輪生し、長さ4-14cm、幅2-5cm、長楕円形、深緑色を呈し、細鋸歯縁です。花は7-8月葉腋に径6-8mm、5裂する白色花を数個咲かせます。5-6mmの球形の果実が秋に実り、冬になっても鮮やかな赤い果実と常緑の葉は正月の寄せ植えに用いられます。

中国の本草書に収載された時期は比較的遅く、『図経本草』（1062）が最初で、「紫金牛は福州（福建省閩侯県）に生ずる。葉は茶の葉のようで上が緑色、下が紫色、実は丸く丹朱のよう。根は微紫色だ。八月根を採り芯を去って暴乾する。頗る巴戟（*Morinda officinalis*？）に似たものだ。時疾膈氣、風痰を去る」と記されています。『本草綱目拾遺』（1765）には更に詳しく「葉の下面は紅色の小木で、山地に生える。長さは1-2尺をこえず、葉は石楠（*Rhododendron* sp.？）に似る。4月に芯が生え、5-6花が叢生し、指麻鈴のように垂れる。花は青白色で、6-7月に天竺子のような小さい実を結ぶ。霜降後には紅色になり、まるで天竺子を大きくしたようである。葉が樟（クスノキ *Cinnamomum camphora*）に似ており茎が短いので、世間では矮脚樟と呼んでいる。山の人はいつもこれを掘って市に出し、鉢植えにしてやる。別名を葉下紅ともいう」とあり、薬用以外に鉢植えで楽しんだようです。

日本においても各地に自生することから、古くから親しまれていたので、『万葉集』（806年頃）にはヤブコウジの古名「山橋やまたばな」の名で多くの歌が詠まれています。

消残りの雪にあへ照るあしひきの山橋を裏に摘み来な（大伴家持）

『古今和歌集』（912）には

わが恋を忍びかねてはあしひきの山橋の色にいでぬべし（紀友則 恋歌三）

「山橋の色にいで」とは艶のある真紅の実の色が非常に印象的なことから詠まれたことが伺えます。冬の季語であることから、雪との対比を詠んだ歌も多くあります。

更に『源氏物語』（平安時代中期）の浮舟には「卯槌をかしよう、つれづれなりける人のしわざとみえたり。またぶりに、山橋作りて、貫き添へたる枝に」と山橋の枝に歌を添えた記載があります。『枕草子』（平安時代中期）にも正月初の卯の日に邪気払いの槌について記されています。どちらも卯槌の飾り物として使われたようです。女子の16才の元服の祝いに櫛箱の中に入れる風習もありました。また『延喜式』（927）造酒司の踐祚大嘗祭神料に「山橋子」の名が見受けられます。

江戸初期の本草書、『多識編』（1612）には「紫金牛、今案ずるに阿加太末乃岐」と赤い果実から名付けられた別名が記されています。冬に赤い実をつける常緑の植物には、アカネ科のツルアリドウシ（*Mitchella undulata*）を別名「一両」と呼び、「十両」のヤブコウジや「百両」のカラタチバナ（*A.*）、「千両」のセンリョウ科センリョウ（*Sarcandra glabra*）、「万両」のマンリョウ（*A. crenata*）と別名で呼び、いづれもお正月の植物として使っています。園芸書『花壇地錦抄』（1695）には「やぶこうじ、正月かざりに用るたち花の実あかし」と記され、卯槌のように飾り物として用いられたことが記されています。実際に、園芸としての栽培が盛んになったのは寛政年間になってからで、『橘品』（1797）には45品種が収載され、『草木錦葉集』（1829）には白斑23種、黄斑8種、覆輪5種、別斑6種、葉替12種が収載されています。この頃から明治時代に掛けて、斑入り品種などが競って栽培されたようです。現在は多くの品種が特殊な古典園芸品種として維持栽培されています。（村上守一 記）